

「学校林」を舞台にした 協調性を育む生徒向け親林ツアーの変遷

駒沢大学高等学校 理科 海老澤 慎一

【生徒向けの親林ツアー】

皆さんは学校林にどんな思い出があるだろうか？ 第一学年では生徒たちがクラスの木を育て、クラスでデザインした意匠をこらした看板と共に植樹をしていく。全生徒が学校林と触れ合うのは、これが唯一の機会である。残念ながら、それ以降、この場所を訪問して思い出に浸るには、自力で長野県信濃町まで来なければならぬ。そこで、もっと生徒が学校林に来る機会を設けようと企画されたのが生徒向けの親林ツアーであった。生徒向けの親林ツアーの目的は学校林により親しみを感じ、東京という大都会ではできない経験から自分を見つめなおしてもらおうことである。



図1. 2017年のクラスの看板。

【二〇一三年】

当時の生徒向けの親林ツアーは、一月に行われていた。駒澤大学の野尻寮（大一小一九室、一〇〇名宿泊可能）に宿泊し、二泊三日の日程で活動を行うものであ

った。私が初めて参加したのは二〇一三年のことで、その時は校友会と美術部が参加した。校友会は、文化祭を終えた時期であり、生徒会長の一年間の仕事が終了する時期である。そのため、このツアーは世代交代をするためのイベントであり、一大イベントである文化祭の反省をじっくり行い、さらには次期政権をどうするかが議論される場である。本校の校友会活動は連続性が重要視されている。それは文化祭や被災地応援などの活動は、他校や地域とのつながりがあって成立しているイベントであるためであり、校友会の次期政権の顔ぶれを決める際には、それをきちんと引き継げるかが重視されている。

一方、親林教育委員会としては、校友会とは別に、他の部活動にもこの長野県信濃町との絆や現地の自然豊かな環境を合宿などに活かしていただきたいと考えていた。そこで二〇一三年の時は、当時の美術部顧問の増田先生を通して美術部に参加していただいた。当時の美術部員は校友会と兼部している者が数名おり、参加しやすい環境にあった。我々には普段、合宿などしない部活動に対しても、この機会に合宿というイベントを通して部員同士のつながりをつくるきっかけにしたい、という思いもあった。

この二〇一三年一月に行われた親林ツアーでは、校友会は森林でのセラピー体験、美術部は野尻湖湖畔でスケッチなどを行った。昼は森林での活動、夜はこれからのことをミーティングで話し合うのが、校友会の動きである。それから、夜に森の中を歩くナイトハイキングが予定されていたが、この時はあいにくの雨で中止となった。ナイトハイキングとは、視覚の効かない夜の森を、聴覚や先導者を頼りに歩くものである。



図2. コンテナの塗装前の姿（右）と内部の様子（左）。

道は獣道のようなものもあり、張り出した木の枝や足元に注意しながら歩くため、普段とは比べ物にならないほど五感を使う。星の光やホタルの光に感動することもある。多少の雨なら強行するつもりではあったが、土砂降りになってしまったのである。参加した生徒には、屋外での活動を苦手にする者もあり、林間学校以外では自然にろくに触れたことのない者もいた。そういう子供たちは自然豊かな環境に対して必ずしも好意的とは限らない。だが、長野県信濃町のような自然に囲まれた土地での生活・活動は、彼らに東京のような都会が決して一般的な場所ではないこと、自然の中でその力を利用したり、頼ったりして生活している多くの人々がいることを実感させてくれたことである。

夜、宿泊したのは駒澤大学が所有する野尻寮であった。法人諸学校の生徒は一泊二〇〇〇円、引率教員は三〇〇〇円、その他の方は四〇〇〇円で宿泊することができた。大学の寮に宿泊できるというまたとない機会であり、寮の美味しいご飯をいただくこともできた。難点があるとすれば、寒いことである。野尻寮には暖房器具がなく、一月ともなれば相応の冷え込みがある。教員が使うような部屋にはコタツが用意されていたが、生徒たちが頼みとするのは布団と重ね着であり、非常に寒い夜を過ごす結果となった。

三日目は、絆の森に設置された、電車の貨物コンテナをペイントする作業を共に行った。まず、全員が基盤となる空色の塗装をコンテナに施し、それが乾いた場所に美術部の面々がイラストを描き上げていく。この時描かれたのは、某ジブリアニメ風のキャラクターである（著作権大丈夫だろうか？）。林間学校に参加したことのある先生方なら、目にしたことはあるだろう。現在、このコンテナは植樹や絆の森での活動



図3. 雪に閉ざされた学校林。

で用いる道具類などを収納しており、現地での活動になくはならないものになっている。絆の森は主に信濃町柏原地区の林業者の方々によって整備されているが、生徒の活動も毎年少しずつ積み重なって学校林を形成する一助となっている。

作業の後は、この地域の名物となっているタケノコ汁を作って皆で食べた。サバの水煮の缶詰を開けて、タケノコの味噌汁に加えるのが特徴である。

【二〇一四年】

この年は天候や三年生の受験などがあり、ツアーは中止となった。その後、生徒の参加がより見込めるのではないかと期待、その他の業務との重なり合いや駒澤大学の野尻寮が空いている時期を考慮した結果、生徒向けの親林ツアーは五月のゴールデンウィークの時期に移動することになった。また、一月から五月に移動したことで、森林内での活動も初夏の新緑の中で行うことができ、より魅力的なものになることが期待された。

【二〇一五年】

二〇一五年は例年と比較して若干にぎやかな編成での親林ツアーとなった。これは親林教育委員会のメンバーである筆者が、当時ワンダーフォーゲル部と探求部の顧問も務めており、それらの部員達も参加したためである。校友会の活動を長谷川先生・杉田先生が、美術部を西村先生

が、ワンダーフォーゲル部の活動を一部高木先生に手伝ってもらい、そして探求部の活動を主に私が見ることになった。初めての五月実施（三日～五日、ゴールデンウィーク）であった。イベントの名称も親林ツアーではなく、ゴールデンウィーク合同合宿という形で、あまり合宿をしない文化系部活動の合同合宿、なおかつその一環として親林活動も行うというような形を取った。

まず、初日は宿に到着し、部屋の割り当てなどを行った。以前と同じく野尻寮を宿泊場所としたが、一月ほどの寒さはなかった。そのため、



図4. 野尻寮の食道をいっぱいにする本校生徒。

生徒たちが寮内のロビーで歓談を行う姿も見られた。一月は寒くてそんなこともできなかったのである。二日目の活動としては、校友会は、午前中は一年生に対するオリエンテーションと役割決めを行った。午後は、親林セラピーやマウンテンバイクによるアウトドア活動を通して、生徒同士の仲を深めていた。運動部と違い、全員でチームを作って活動する機会が文化祭くらいしかないこともあり、このような機会は貴重であろう。ワンダーフォーゲル部は現地のガイドに案内してもらい、飯縄山

へと登山を行った。二〇〇〇メートル級の山は初めてであり、雪も残る中貴重な経験ができた。この時は、私が探求部の活動を案内する都合上、ワンダーフォーゲル部には高木先生についていただいた。女子生徒たちは駒大高校を代表するイケメン高木と一緒に活動でき、満足できたようであった。生徒たちおよび高木先生は満足と疲労により、宿舎に帰還後、夕食時まで爆睡することとなった。美術部は野尻湖の湖畔に出て、新緑の風の中でスケッチに勤しんだ。東京ではなかなかできない活動である。

また、探求部は学校林で森林調査を行った。森林調査では、木の種類の同定と三角比を利用した高さの測定を行った。継続的にできれば、学校林に植樹した木がどのように成長しているか明らかにすることができるだろう。この日の夕食は皆で野外でカレーを作った。五月の合宿だからこそできることであろう。火起こしや火力の加減の仕方は簡単ではなかったが、林間学校でも調理などはしないため生徒にとって印象に残る思い出になったようである。役割を分担して共同で調理し、完成した料理を皆で味わうという一連の流れは、一つの完成された協調性の学習であると思う。

最終日は、サイクリングを楽しんだ。インドア派の生徒でも楽しめるという平地のコースのサイクリングである。初夏の野尻湖湖畔を走り回るのは非常に爽やかな体験であった。また、サイクリングが苦手な生徒は野尻湖で釣りをしているのんびりと過ごすことができた。最後に学校林で植樹を行い、帰途に着いた。帰りは重度の渋滞に巻き込まれてしまい、解散時間が非常に遅くなってしまった。

【二〇一六年】

二〇一六年は校友会、美術部、ワンダーフォーゲル部が参加してのゴールデンウィーク合宿となった。校友会を長谷川先生、加藤先生、美術部を西村先生、ワンダーフォーゲル部を私が引率した。

到着初日は学校林に皆で植樹を行い、野尻寮で夕食をいただき、就寝といった流れであった。去年の合宿を経験している者も少なくなく、生徒たちの片付けや各部屋での騒ぎ方も手慣れたものである。

二日目は各部活動ごとに活動した。校友会はミーティング、ワンダーフォーゲル部は苗名滝へとトレッキング、美術部はスケッチを行った。苗名滝へのコースは、後に「癒しの滝トレッキング」という名で林間学校の体験にもなり、なおかつベテランの吉野先生をして「癒しじゃないよ、アドベンチャーだ」と咆哮させたいわくつきのコースである。私もこのコースを歩いた。低山登山などで歩くことにある程度慣れている者には、疲れはするものの達成感のあるコースであった。歩き続けて乳酸の溜まった体を滝の水で冷やす瞬間はまさに癒しである。もっとも生徒たちは癒しと疲れによって、宿舎に帰還後、夕食時まで爆睡することになった。

夕食では、野尻寮の調理器具を借りてカレーパーティも行った。部活動ごとにチームを組み、皆でカレーを作り、その味を競うのである。この年の参加者は女子生徒の比率が高かったこともあり、どの部活動・チ



図5. キャンプファイヤーを囲んでマシュマロを焼く女子生徒たち。

最終日は、学校林で秘密基地づくりとツリークライミングを行った。どちらもこの年の林間学校のプログラムに組み込まれており、試験的にこの合宿で体験してみる形となった。森の基地づくりは初めての試みであるが、ツリークライミングは以前の林間学校でも行われていた。だが、以前はスキー場の木で行っていたのに対して、今回は学校林での開催となる。それだけ学校林の整備が進んだと言える。二年生、三年生たちはまるでもう一度林間学校に来ているかのように楽しんでいた。

ームが一番女子力を発揮できるかと盛り上がる事ができた。出来上がったカレーは屋外でキャンプファイヤーを囲みながら食べた。キャンプファイヤーの炎で照らされながら、友達と話し、食事を取るあの独特の雰囲気は良い思い出になった。もちろん、カレーパーティー以外のご飯は野尻寮の美味しいご飯をいただくことができた。



図6. ほほえましく何かを見守る小島先生（上）とおそらくはその対象となっている佐々木先生および中島会長（下）。

二〇一七年は筆者はこの合宿に参加することができなかった。ゴールデンウィークに家族で予定がある部員もいたため、部活として参加することができなかったのである。一方で英語部に対して誘いの声がかかった。だが、英語部と校友会の兼部が数名おり、彼らは参加したものの、それ以外のメンバーは予定が合わず、結局校友会のみと参加となり、佐々木先生は各部活動が合宿として利用する場合の下見役として合宿を手伝って下さった。

【二〇一七年】

生徒たちは初日に野尻寮に入り、ナイトハイクを楽しんだ。筆者が参加したときは、東京では見れないような星空や森の中のホタルの瞬きを楽しむことができたが、生徒たちも真つ暗な中、様々な蠢きの中に自分がある感覚を味わってくれただろうか。思いのほか、はしゃぐことも騒ぐこともなく、ガイドの指示に従っていたとのことである。

二日目は学校林でヨガ、および森の基地づくりに取り組んだ。ヨガは森の中に入って行い、のびのびとした時間を過ごすことができた。内省的な生徒だけでなく、日頃部活で忙しく一人で過ごす時間がほとんどない生徒にとっても、このような自分と向き合う時間は貴重なのではないだろうか。基地づくりは、昨年より林間学校のプログラムに入った活動であり、学校林の木々を利用して秘密基地を作るといものである。筆者には非常に楽しそうに思えるのだが、昨年は不平も聞こえてきた。その代表的なものとしては、①虫が多い、②秘密基地というほどのものが作れない、といったものである。①についてはどうしようもない。羽虫の少ないだけで開けた場所で行うくらいしかない。それを踏まえて、それでもやりたいという方に参加していただくか、軍手や衣類、防虫剤を活用して虫に触れないよう動いていただくしかないだろう。②については、時間や道具の制約上、「秘密基地」というほどおおがかりなものが作れず、またせつかく作ったものも解体しなければならぬという点への不満である。解体については、例えばそのまま残しても積雪で壊れるようなものを作れば生徒は満足してくれるのだろうか。今回の合宿では、木と木の間に作ったデッキ、ハンモック、ブランコなどが作成された。生徒たちは良く協力しあっており、作成後も楽しそうに遊んでい

た。見晴らしが良いデッキやごろんと横になれるハンモックは「自然の中に自分たちのスペースを作った」という感覚を持たせてくれるアイテムと言えるだろう。さらに宿舎に戻ってから恒例となったカレー作りに取り組み、その味を競った。毎年、火力やその後の洗い物で苦戦するが、校友会のメンバーは勝手知ったる様子で作業を進めていた。

三日目も基地作りである。皆で昨日の時点で未完成の部分を補強したり、作るだけでなく実際に作品で遊んだりして過ごした。昼食もここで取り、まさに森と関わって過ごすことができた三日間であった。

【考察】

二〇一五年より開催時期が一月から五月へと転換することで、気温や季節がより屋外活動に適した環境で活動できるようになった。もちろん、秋の森には見どころがないわけではない。だが、自然体験の乏しい都会の生徒を対象としている以上、森林が美しい初夏に活動できることの意義は大きい。一方でより昆虫など小動物の活動が見られる季節でもあるため、虫嫌いの生徒や毒を持った昆虫などに留意する必要がある。例えば、林間学校を騒がせたマイマイガの大量発生、その幼虫が発生するのが五月である^①。また、生活面ではより温暖な五月に開催できることの意義は大きい。気象庁のホームページで長野県信濃町の月別平均気温を調べてみると^②、一月が五・一度なのに対して、五月は一二・九度である。生徒たちが宿泊する野尻寮には暖房がないため、一月に開催していた頃は夜間には部屋でひたすら着込んで寝るくらいしか、寒さへの対抗措置がなかった。東京より高地ゆえ、五月といえど

も冷え込む日はあるだろうが、それでも一月より快適な気候で活動できるだろう。

一方で、このツアーの主参加団体とも言うべき校友会は、このツアーでの活動の意義を大きく転換することになった。一月開催の頃は、文化祭の反省を行い、次の生徒会首脳陣となるメンバーについて考える時期であった。しかし、これが五月に移動したことで、ここにさらに新入生の歓迎、および顔合わせといった意味合いも持つようになった。長年親林教育委員会を引っ張ってきた長谷川先生としても、この五月の合宿をコミュニケーションキャンプ⁽³⁾と位置づけ、その視点から運動部・文化部を問わず参加を促してきた。二〇一七年までに参加してきたのは、美術部、ワンダーフォーゲル部、探求部である。五月と言う、新入部員が入りたての段階で、部活動+トレッキングやサイクリングといった自分の身体をのびのびと使うことができ、なおかつ自分のペースと集団のペースの双方に気を配らなければならない活動に取り組むことは、仲間意識の醸成やお互いの信頼関係の第一歩を築き上げるのに有効であると考えられる⁽⁴⁾。また、ナイトハイキングやキャンプファイヤーといった活動は生徒に非日常的な空間を体験させ、それはいつもとは異なるメンバーとの交流にもつながる⁽⁵⁾。学年毎に生徒の雰囲気は異なり、チームとしての意識の醸成に苦慮される部活動顧問の先生もいらつしやると思う。いつもの部活動の練習とは異なる方向からのチーム作りとして、このような合宿の場はいかがだろうか。過去の内容としては、基本的に各部活動の野外活動+学校林での活動から構成されており、近年はさらに宿舎でのカレーパーティなどの交流を目的としたレクリエーションが組まれている。野外活動のフィールドとして、野尻寮周辺や学校林、信濃町の環境は申し分ない。野尻寮も駅伝の合宿などに使われる場所であ

り、入浴設備や宿泊設備も整っており、ご飯も出る。値段も比較的安価と言える。

問題点としては学校から遠いことだが、普段とは異なる環境で活動や友達との交流に臨めると言い換えることもできる。人間とは単純なもので、環境が変わると心機一転して物事に取り組もうとすることもある。また、信濃町周辺は、C・W・ニコル氏のアフアンの森をはじめ森林セラビィの本場であり、信州自然大学や森林メデイカルトレーナーのサポートを受けることで、様々な野外活動ができる条件にある。

現代の日本の子供たちにとって、子供たちの世界にとって最も大切なコミュニケーション能力は、ノリを合わせ、みんなと盛り上がることできる能力、同調力であるともされている⁽⁶⁾。だが、自然の中では、SNSの文字や「ノリ」とは異なるコミュニケーションが可能である。料理ならば皆に仕事を分担したり、調理の順番を考えるなど段取りを上手に行ったりする力が求められる。トレッキングならば、自分の歩くペースおよびそれを可能にする体力、そして周りのメンバーの様子を見ることのできる観察力や、気になるメンバーに対する声かけなど気配りが求められる。実際に、幼少期にキャンプや野山遊びといった自然体験を頻繁に行った大学生の方が、そういった体験をあまりしていない大学生よりも他人への共感や社会的スキルが高いという研究結果もある⁽⁷⁾。いつもと異なる世界での活動は、きっといつもの携帯電話を介した、あるいは学校での「ノリ」中心の人間関係に異なる色の光を差し込ませることになるのではないだろうか。それは、これまでとは違った視点での自己や他者の評価を可能にし、第三者的な視点で自分たちを見つめなおす

ことにつながるのではないかと思う。

【謝辞】

本稿をまとめるにあたり、親林教育委員会として活躍されている先生方、そして我々の活動を見守って下さる校長先生・教頭先生、林間学校で引率される先生方に感謝致します。先生方のご協力なくして、今の学校林はなく、その地に生徒の思い出を結ぶこともできなかつたでしょう。親林教育委員会のメンバーがどんどん減っていく中で奮戦し続ける、長谷川・高木の両先生、いつもありがとうございます。

【引用文献】

- (1) 東浦 康友、上条 一昭 (一九七八) 「マイマイガ大発生の収束過程の死亡要因」北海道林業試験場報告No. 15, pp. 10-16.
- (2) 国土交通省気象庁ホームページ http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/nml_and_ym.php?prec_no=48&block_no=0394&year=2017&month=&day=&view=
- (3) 黒姫高原体験教育プログラムプロジェクトチーム (二〇〇二) 「コミュニケーションキャンプ―筑波大附属坂戸高等学校挑戦の記録―」 pp. 101.
- (4) 建元 喜寿、本弓 康之、小林 美智子、吉備 豊、中村 徹、堀出 知里 (二〇〇八) 「入学直後の高校一年生に対する野外教育プログラムの評価」国立青少年教育振興機構研究紀要 第八号 pp. 37-52.
- (5) 佐藤 豊、石沢 順子 (二〇〇五) 「高等学校における野外教育

プログラムの効果―「総合的な学習の時間」に向けて (1)―」野外教育研究 82, pp. 45-57.

- (6) 堀 裕嗣 「スクールカーストの正体」小学館 207pp.
- (7) 山本 俊光 (二〇一二) 「幼少期の自然体験と大学生の社会性との関係」環境教育 Vol. 22-1, pp. 14-24.